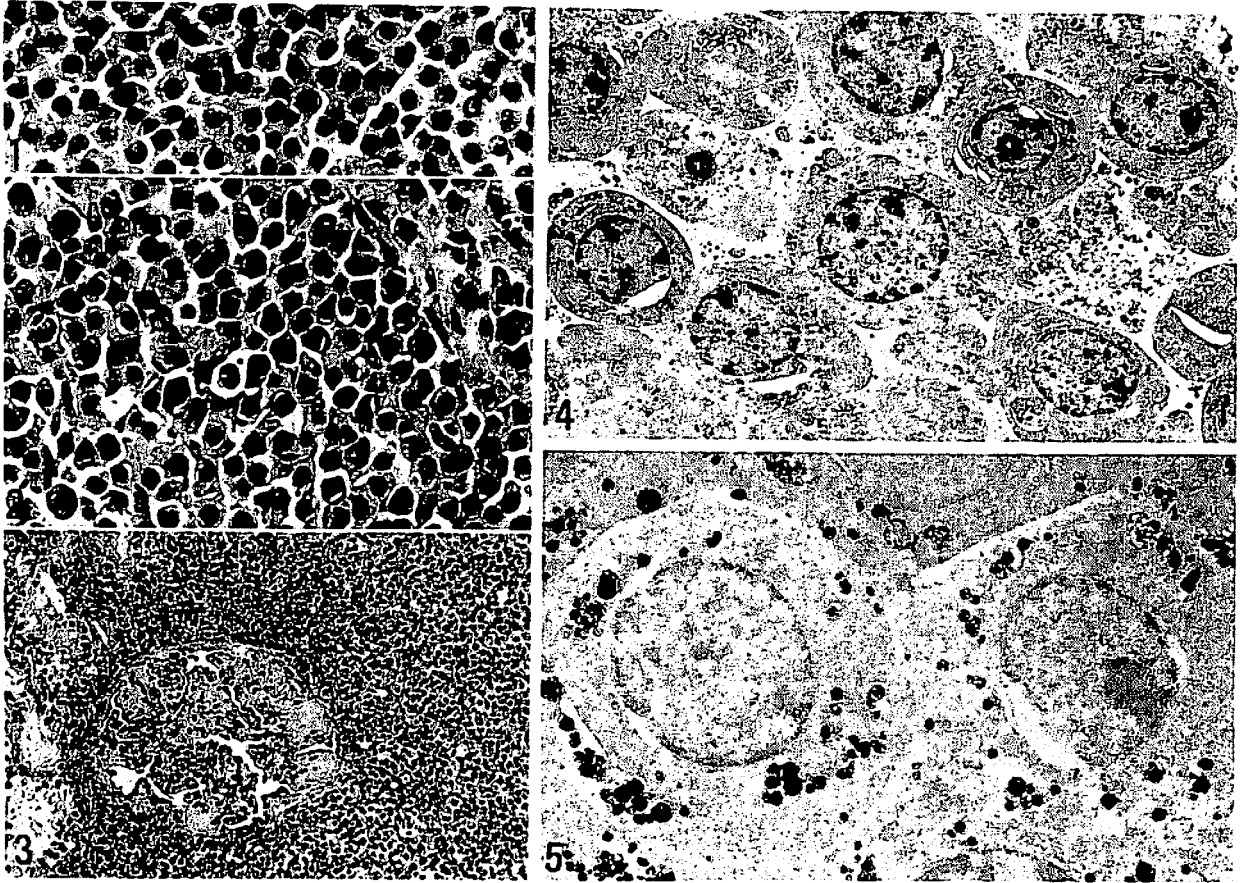


豚の腎

家衛試病理第三研究室・茨城県南食肉衛検出題 第25回獣医病理学研修会標本No.435



動物：ブタ、雑種、雌、2歳。

臨床：著変は認められなかった。

剖検所見：脾、腎、子宮には小豆大ないし大豆大の多発性結節があり、心耳にも数個の結節が認められた。内側腸骨リンパ節は腫大していた。卵巣も両側性に著しい腫大を示し、断面では大部分が均質化していた。以上のような腫瘍化を示す部分はすべて緑黄色に見えた。肝は小葉間が増幅し、赤色調を帯び、肝リンパ節は腫大し、著しい出血を伴っていた。

組織学的所見：腫瘍性増殖は脾、腎（写真1、×400）、心、肺、リンパ節、子宮、卵巣（写真2、×400）に認められた。腫瘍細胞の核は濃染性で、核小体は目立たなかった。細胞質は比較的広く、好塩基性を示すことが多いが、時々明瞭な好酸性顆粒を持つ細胞があった。これらの細胞より大型で未分化な細胞も存在していた。腫瘍細胞にはメタクロマジーは認められず、酵素抗体法による免疫グロブリンの検索では、一部の細胞が陽性に染まったが、対照切片を調べた結果、非特異的反応と判定された。

腎の糸球体には硝子化が認められたが（写真3、×100）、アミロイドではなかった。肝と肝リンパ節には赤芽球系を主体とする高度な髄外造血が認められた。

電顕的に、腫瘍細胞は数個ないし多数の顆粒と中等度に発達した粗面小胞体を持っていた（写真4、×1,800）。顆粒は電顕的ペルオキシダーゼ法により陽性像を呈した（写真5、×4,500）。

光顕的には形質細胞腫を疑ったが、一部の細胞には二次顆粒と思われる好酸性の顆粒があった。また、電顕的には形質細胞腫としては粗面小胞体の発達が悪く、顆粒をデンスボディとすると数が多過ぎるように思われた。細胞の大きさや核のクロマチンは骨髓球に似ていたが、大部分の細胞では一次顆粒だけしか出現しておらず、腫瘍細胞は典型的ではないが前骨髓球に相当するものと考えられた。骨髓は検索できなかったが、肝や肝リンパ節における高度の髄外造血は、骨髓がおかされていることを示唆していた。

組織学的診断：骨髓性白血病（FAB分類のM2に相当）。